

一六・腹を立てるな

「²¹ お前さんたちも聞いている通り、昔から『^① 謀つて人を殺すな。謀つて人を殺す者は、裁きを受けろ』と言われている。²² 加えて、この俺は言っておく。兄弟に腹を立てる者は、みんな必ず罰が当たるぞ。

兄弟に向かつて、『馬鹿！』と言う者はお白洲に引つ張り出され、『阿呆！』と言う者はおぞましいヒンノム谷の焼き場の火に放りこまれる。

²³ だから、祭壇にお供物を上げ申そうとしていて、兄弟がお前さんを恨んでいるのを思い出したら、²⁴ そのお供物はまずそこに置いて、行つて、兄弟と仲直りをして、それから歸つて、お供物を捧げなされ。

²⁵ お前さんを訴えようという人に引つ立てられて『裁判所へ行く』道を歩いている時には、途中で早く仲直りをしなされ。そうでないと、その人はお前さんを裁き人に引き渡し、裁き人は下役に引き渡

し、お前さんは牢にぶちこまれる破目になる。

²⁶ シツカリと言つておくぞ。最後の一文銭の一つを払い終わるまでは、どうしたつてそこから出るわけには行かないのだぞ。」

一七・人の妻を盗むな

「²⁷ お前さんたちも聞いている通り、^② 『人の妻を盗むな』と言われている。²⁸ 加えて、この俺は言つておく。他人の女房に目をつけて、何とかしてその女を我がものにしたいものだ、のどから手が出るほどに欲しがっているような輩は、誰でも既に心の中で、人の女房を盗んでいるのだ。

²⁹ それ、右の目がお前さんを人の道に外れさせているぞ。そんなら、そんな目玉はグリツと抉つて棄ててしまえ。体のかけらをなくす破目になろうとも、体まるごとヒンノム谷の焼き場の火に投げこまれるよりは余程ましだぞ。

³⁰ それ、右の手がお前さんを人の道に外れさせて

仲間を見下げる思いがあるかぎり、律法を守ったことにはならない

21 「あなたたちも聞いているとおり、『殺すな』、人を殺した者は裁きをうける、と昔の人々は命じられた。22 しかし、わたしは言う。仲間に対していらだつ者はだれでも、裁きを受ける。仲間を『ばか』呼ばわりする者は最高法院に、『ぐず』と見下げる者は火の地獄にあたいする。23 だから、あなたが祭壇に供えものをささげようとして、仲間があなたにうらみをいだいていることを思いだしたなら、24 供えものをそこに、祭壇の前に置いておき、まず行って、仲間と仲なおりをし、それからもどって供えものをささげなさい。

25 あなたを訴える人といっしょに行くとき、途中ではやく和解しなさい。さもないと、訴える人はあなたを裁判官にわたし、裁判官は下役に引きわたし、あなたは懲役牢に入れられる。26 はっきり言うておく。最後の一文をかえすまで、そこから出ることはできない」。

「不倫」は女性への人権侵害——見下げる思いから出る

27 「あなたたちも聞いているとおり、『不倫をするな』(申5・18)と命じられている。28 しかし、わたしは言う。欲情を交わすつもりで女性を見る者はだれでも、すでに心で不倫をしたのである。29 もし、右の目があなたに人をつまづかせるなら、えぐり出してすてしまえ。からだの一部をうしなっても、五体そろって地獄に投げこまれないですむなら、あ

中傷について

(マタイ福音書五章二二—二六節)

あなたたちも聞いた通り、あなたたちの先祖は、「殺すなかれ、殺すものは裁かれるであろうから」と言われた。しかし、私はあなたたちに言おう。「その兄弟に腹を立てる人は、裁かれるべきである」と。

私たちがこの一節を読み終わった時には、深い静寂が生じた。

誰も話し出す者がいないので、私はトマス・ペーニアに——これについて、どう思う？ と尋ねた。

彼は答えた。——僕はまだこのことについて、よくよく考えている最中ですだ。

さらに長い沈黙が続いた後で、彼が言った。——僕はここには、一つの中に二つの戒律があると見ました。まず、ただ、「殺すなかれ」と言われています。だがこの一つのことのなかには二つの戒律があります。「殺すなかれ、だがその兄弟も憎んじやあならねえ」。二つともしてはなんねえことです。そこで、僕は、この二つのうち、最初の戒律だけが、まだまだだと思いましたが。どうして

かつて、イエスさまは、この御言葉で、反目の中に生きちゃあなんねえ、平和と兄弟愛のうちに生きろ、って、言おうとないましたんでしょうが。人間でもんは、他人を助けるべきだってことでしょうが？ そしたら、憎しみは、全部、消えてしまうつてんでしょう。

私は答えた。――私たちが殺さないというだけでは、充分ではないんだね？ 幸せであるためには、トマスが言ったように、私たちは兄弟のように生きなければならない。

トマス 人を憎んでいる者には、平和がないってことです。そんな人たちは、いつだって、争いごとのうちに暮して、敵の名を挙げりゃあ、長い目録ができるってもんですよ。人を憎みゃあ、また憎み返される。争いごとが起きれば、人殺しひところだってありまσα。だから、イエスさまは、この悪を前もって根こそぎになさろうとなすつただ。

マヌエル それで、僕には、この戒律はとっても厄介なものになったと思われるんだ。モーセの十戒は僕たちに、殺人を禁じている。今や、殺人を犯した者だけが裁かれるのではなく、自分の兄弟といざこざを起こした者まで、裁かれることになる。これが、この問題をとても複雑にしているんですよ。

オリヴィア けれど素晴らしくもしているのよ。私たちは、この新しい掟を、ただ正しいものとして理解しなければならぬわ。なぜなら、それは私たちにとって、よりよいことだからです。それは厄介なんではなくて、よりよいのよ。「私は誰も殺したりしなかった、だから、私に罪はない」って考えている人たちが居るわ。だけど、殺人と同じくらい悪い、隣人に対する不正というものがあるの。こ

の不正の根は、隣人に対する愛の欠如に根ざしているのよ。これによって、イエスの掟は、愛の掟になります。だから、私はこのことで複雑になったなんて、思わない。

マヌエル もちろん、その方がよいよ。だが、それを守ることは遙かに難しくなった。

オリーヴィア もしかすると、私たちがそれを欲していないからじゃないかしら。でも、私たちが知識階級インテリゲンチヤだったら、愛に満ちた、憎しみのない生活をおくることができるわ。私たちがそう望むならば、ということを私は言っているの。

マヌエル それを望まない人間が居るだろうか！ それはただ……そうだ、この困難さは、ただ、人が厄介な性格を持っていることなんだよ。

オリーヴィア 神さまを愛していたら、すべてはやさしいことよ。私はこれが困難な戒律だなんて、思わない。難しいとは思われないのよ。ただ、私が利己主義者エゴイストだったら、それを難しいと思うでしょうね。だけど私たちが利己主義者エゴイストでなかったら、他人を助けるなんてことは、まったくやさしいことよ。やさしいだけではなくて、その上、素晴らしいことね。他人を赦すこともやさしくなるでしょう。あるいは、他人を理解すること、と言った方がよいかしら。兄弟たちの間にいるように振舞うってことは、まったく必然的な流儀じゃないの。

私は言った。——イスラエルの人々は、「殺すなかれ」という戒律を知っていた。しかしながら、その国に多くの殺人や殺害があったのは、社会が不正と迫害とに満ちていたからなんだ。イエスは憎悪も軽蔑も不正もない社会を望んでおられた。それはつまり、世の中に何の不正もなければ、私たちは

犯罪のない社会を持つことができるということなんだ。同じ理由から、後にヨハネは、「その兄弟を憎む者は、殺人者だ」と言った。（当時、不正を行う人を、人々は人殺しとみなした。）

トマス みんな、僕らが自分自身を解っていない、ってことが原因になってますだ。恐らく、僕らは冷静な時にゃあ、「われわれは兄弟なんだ」って自分に言い聞かせますだよ。「われわれは悲しい目になんか会いたくねえ」と。そして、僕らは恐らく本当は愛し合っているんでござえましよう。ところが一度、アルコールってもんが頭に廻ろうもんなら、大騒ぎが始まるだ。きつと誰もそんなことあ、思っても見ねえ。だけんど焼酎が、みんなあべこべにしまつて、喧嘩が始まりますんだ。

青年たちのひとりが言った。——しかし、それは多分、すでに以前から心の中に憎しみがあつたからじゃないんですか。

トマス そうかも知れねえし、そうでもないかも知れねえ。つまり、僕は、一本の煙草もふたりで分け合い、あれやこれや親切にし合っていた、幾人かのほんとにいい友達を見て来ましただ。そうでしょうが？ だけんどそいつらが一度少しでも酒を飲んだとなると、そりゃあもう、ただの一言だつて必要ねえ、そしてもう……

青年たちの他のひとり。——もしかすると悪い友だちだったんじゃないのかな。トマス爺さん。

トマス 違う、違う。それを僕はよくこの目で見て来ただ。あの人たちはお互いに、ほんとうに好き合っていただよ。だけんど、或る時一杯ひっかけると、一言か二言ありますだ……。最初の言葉は多分、まあまあ、と考えて、彼奴の言っていることも恐らく一理あるなんど思つて、呑み込んで

しまいますだ。だけれんど、もう一杯、次にもう一杯飲むと、もう、抑えが効かなくなってしまう。そして、大喧嘩がおっばじまる。儂らのような人間、地球上の人間のためにあるものの中で、儂は焼酎が一番悪いものだと思いますだ。

娘たちのひとり。——貧乏な人たちにとってはですね。私たちは、貧乏な人にとっては、その通りだと言いたいんです。だってお金持の人たちは、隣人を傷つけるのに彼らだけの独特なやり方を持っているんですもの。

トマス　そうですが。だけれんど行きつくところは、金持たちの場合、もっとあつさりしたものでしょうが。金持は、何か悪いことをしたとしても、金を払っちまえば、もう自由です。だけれんど、儂らの場合は違いますよ。たとえば殴り合いがあったとして、一方が他方の頭を殴ったとしたら、多分、殴られた方は怪我をしても、医者に行く金かねがありません。すると殴った方は、刑務所に入っても、金を積んで自由になるその金がない。どうなろうと、どうでもいいようなんですが、いって双方が損をしていますだよ。

しかし、その兄弟を辱しめる者は、衆議所で裁かれるであらう。そして、その兄弟を白痴呼ばわりする者は、地獄の火に焼かれるだけの罪にあたいする。

私は、最高裁判所、あるいは衆議所は、ユダヤ人たちにとって、最高の権威であることを説明した。

——ここで「地獄の火」と呼ばれているのは、イエスの御言葉では「ゲヘナの火」と言われているものなんだね。ゲヘナというのはエルサレムのごみ捨て場で、そこで廃物が焼かれていた。イエスの時代には、しかし、ゲヘナと言われれば、すでに同時に懲らしめの場所だと思われていた。つまり私たちが今では「地獄」と呼んでいる場所なんだね。実際、イエスがこの時、「地獄」を考えていらしたかどうか、あるいはまたこれが当時の語り口であったのか、正確なことは私には解らない。

オスカールが言った。——これは僕の想像なんだけれど、エルサレムはここでは、憎む人にとって居場所のない、愛の都の象徴として考えられているのではないだろうか。その兄弟と平和に、共に生きて行くことができない者はこのゲヘ……何と言ったかな、に放り出された。つまり、なんの役にもたないごみのように。

——そして、炎は何も役にたたないものすべてを焼きつくす——とオスカールの妻のアンドレアが附け加えた。

トマース 自分の兄弟を馬鹿者呼ばわりする人間は、他の者よりもずうっと馬鹿なんですよ。違いますか？ なぜなら、その男は自分の兄弟のことが解っちゃいねえんですから。他人を馬鹿なんどという者は、その言葉がどんな侮辱にあたるかを、解っちゃあいねえんだ、と僕は思ってますだよ。だから、そんなことを言うことは、自分自身が愚かな人間だってことでしょが。

私は言った。——しかし、人が自分の兄弟になし得る最も悪い侮辱は、搾取なんだよ。人々を意図的に、しかも私利私欲から社会的に低い地位に置いておこうとする……

フエリベが後を続けた。——そんな奴らは、貧乏人たちを馬鹿と考え、馬鹿として扱い、どんな教育の可能性も与えない。

ダニエル 雇い主というものは、いつだって自分の労働者たちをじろりと睨んで、彼らを馬鹿呼ばわりするんだ。そして労働者たちは、その御機嫌を伺わなければならないんです。

ロジータ だけど《馬鹿》という言葉は、時々、家庭でも、あるいは友だちの間でも、何も悪い意味でなく使われるでしょ。

ダニエル キリストはこの言葉を、違うやり方の場合に使ったんだ。それは、雇い主が「この脳足りん、お前はまた、なんてたわけたことを為出かしたんだ」というような意味に使ったんです。だから、友人間でこの言葉が使われるような意味ではなかった。

私は言った。——イエスはこの言葉を、いろいろなやり方の引き合いに出したのであって、この言葉はただその例として取りあげられたんだよ。だがイエスはこれによって、私たちが絶対に使うべきではないとか、ただ親しさを表わすためにのみ口にすべきだとか、言っておられるのではないんだね。イエスご自身だって、パリサイ人たちに対しては、これに類する言葉を使っておいでになる。イエスはパリサイ人たちを「無知蒙昧」とお呼びになった。「偽善者」、「腹黒い人々」と見なしたこともおありになる。

だから、あなた方が祭壇に供え物を捧げようとするとき、兄弟が何かあなたに対して含むものが

あることを思い出したら、供え物を祭壇の前に置いたまま、その前にあなたの兄弟と和睦しなさい。そうして後、あなたは帰って供え物を捧げなさい。

トマス 神殿に捧げられるこれらの供え物は、神さまに喜んで頂こうとする贈り物のような物でしょうが。もし、誰かが行ったという、例を考えて見ますと、そこに坐っている他の人間と反目し合っているとしますだ、するとその男には供え物なんてものは、もう全然役に立たねえですだよ。そうなりゃあ、それは、愛なんてものは何もねえ、義務的な贈り物のようになりますだ。この供え物のところを、儂らはこんなふうに理解しなけりゃなんねえと、儂は思いますだ。

オリヴィア この供え物は、自分の罪を赦していただくために、捧げられるものなんでしょうね。だけど、イエスはおっしゃっている。まず自分が辱めた人の赦しを乞わなければならいって。あるいはその供え物は、自分と神さまが仲よくしようと捧げられるものかも知れない。だけど、人が同時に心のうちに憎しみを抱きながら、そんなことをするのであれば、神さまはその男のことなんか、全然、お考えにならないでしょう。隣人への愛こそが、私たちが神さまに捧げることができる最善の供え物でしょう。

私は言った。——ユダヤ人たちは、供え物の効果を信じていたんだね。そしてイエスはここで彼らにそれを禁じているのではないんだ。イエスはただ、彼らがまず愛を実践すべきだと言っているんだね。しかし、後にイエスはこんな捧げ物は不必要で、神が喜ばれる唯一の捧げ物とは、隣人への愛だ

と言っておられる。イエスの弟子たちはその後、このような習慣を完全に止めさせてしまった。パウロは、他の人々に仕え、すべての物を彼らと分かち合うことが、神に捧げるべき唯一の捧げ物だと言っている。

フリオ・ラモン ジャア、現在、教会で行われているこのような祝いごとのすべてについて、どう言えがいいんですか？ 僕は、神がこんなことに関心をお示しにならないんだったら、それらは廃止されなければならない、と想像するんだけど。

アダーン すべての搾取と階級別によるすべての分断が廃止されるまでは、神は本当の捧げ物さきを供えられたことにはならない。そうでしょう？

トマス そうですだ。

私。——だからこそ、カミロ・トレスは、ミサに真の捧げ物をするために、まず、社会の变革のために闘わなければならなかったのだ。

誰かがあなたを訴え、裁判官に渡そうとするときは、道の途中でこの人と和解しなさい。そうすれば、相手はあなたを、下役に渡し、ついには牢に投げ込んでしまう裁判官に渡すこともないだろう。なぜなら、あなたは最後の二銭を支払うまで、その牢から出ることがなくなってしまうだろうから。

マヌエル これも和解に関することだ。

オリヴィア すでにトマースが言った通りだわ。二人の貧しい人間が相争えば、それはいつも当局の仕事なのよ。二人とも損をする。ということは、愛、つまり、共に仲よく暮して行くということは、貧しい人々にとって有益なことなんです。裁判というものは、ここにも警かれています通り、ことごとく「最後の一銭にいたるまで」お金のかかるものよ。一方が取り立てようと思う物は、他方からすれば、奪い盗られるということなのよ。

トマース 金が無かったら、その男は何とかして、多分、雇い主に借金してでもこしらえなければならねえだ。そしたら、本当にこの男にとってまずいことになる。牢に入らなくても済むかも知れないが、どうやって金を掻き集めたかを、思い知ることになるんでさあ。結局のところ、その男にとっちゃあ、牢に入っている他の者よりもひどいことになるんでさあ。

ラウル イエスはここで、俺たちに、愚かであってはならないと、言っているんです。法律が弾圧的だったら、お上の厳格な規律の手に落ちないために、余程お互いに一致団結した方がいいって、言っておいになるんだ。

私。——この箇所は、すべて、現在の私たちの国の体制に適用され得るね。そしてきっと、イエスの時代にも、その有効性があった。だが私は、この箇所はこの事実だけを言っているのではないと思う。むしろ、これは比喩としての方が遙かに大切な意味を持つのではないかな。

ラウル だが、ここで話題になっているのは、裁判所であり、警察であり、刑務所なんですよ。

コスタ・リカで学んでいて、ちょうどこの時期が休暇だったため、家に帰っていた青年のドナルド。革命体制には、裁判官も警察官も刑務所もないんだ。

オリーヴィア ああ、そうなの。なんのことを言っているのか、私は今、初めて解ったわ。

ラウル 僕だって、そうだと思う。

オリーヴィア 今、私、まったくはつきりと解ったわ。

ラウル イエスはこの時、擄取者たちの方を向かれた。擄取者たちは、革命裁判にかけられるならば、むしろ、他の者たちと連帯する方がよかったんだ。

フェリペ 不正を為したすべての人に、イエスは善意のうちに和睦しなさいと言っておいでになる。ラウル ここでイエスが与えられた警告がすべての人によって守られれば、革命裁判所なんて存在する必要がない。

フェリオ・ラモン そうなったらば、警察も裁判官も何もいらなくなる。

マヌエル その通りだ。そうなれば、すべてそんなものは必要なくなるだろう。公正な社会では、どんな弾圧も存在する必要がないんだ。

私は言った。——その時は、ただ人々の間に同胞愛だけが存在することになるだろうね。しかし、イエスはこれ以前に、すべての侮辱は、殺人がモーセの十戒によって罰せられたのとまったく同様に罰せられるであろう、と言っておいでになる。(侮辱という言葉で、イエスは隣人に対する憎しみと輕蔑を考えていらした。)最後にイエスは他人を圧迫したものたちに、手遅れにならないうちに、少な

くとも、その犠牲者たちが、彼らを告訴しようとした時には、その人たちと和解するように警告しておいになる。

ラウル 銃殺刑になるのを防ぐために。

私。——銃殺刑か地獄へ落ちる以前にということだね。イエスはここでは、それが地上的な裁きを問題にしているのか、それとも彼岸での裁きを問題にしているのかを、不明瞭なまま放置した。最初にイエスは、地上の裁きである衆議所の裁判について語り、後にむしろ超地上的な意味を持つゲヘナについて語っている。多分、イエスは、私たちが望むままに解釈することができるよう、この問題を未解決のままにしておきたいと思われたんだろう。あるいは恐らく、イエスは双方の裁きを同時に考えておいでになったのかも知れない。

ドナルド よく解らないが、僕にはこの「最後の一銭」までの支払いというのは、死後の生活でもなお支払われなければならない、という意味に聞こえるんだけど。

グローリア イエスさまがここでおっしゃっておいになることを、もし資本家たちが実行してくれたとしたら、暴力革命にまで行く必要はないでしょうね。

アダーン しかし貧乏人たちとの和解ということは、本当に、真剣に言われなければならないことだよ。

ラウル 愛と理解に満ちた犠牲者たちへの償いということもだね？